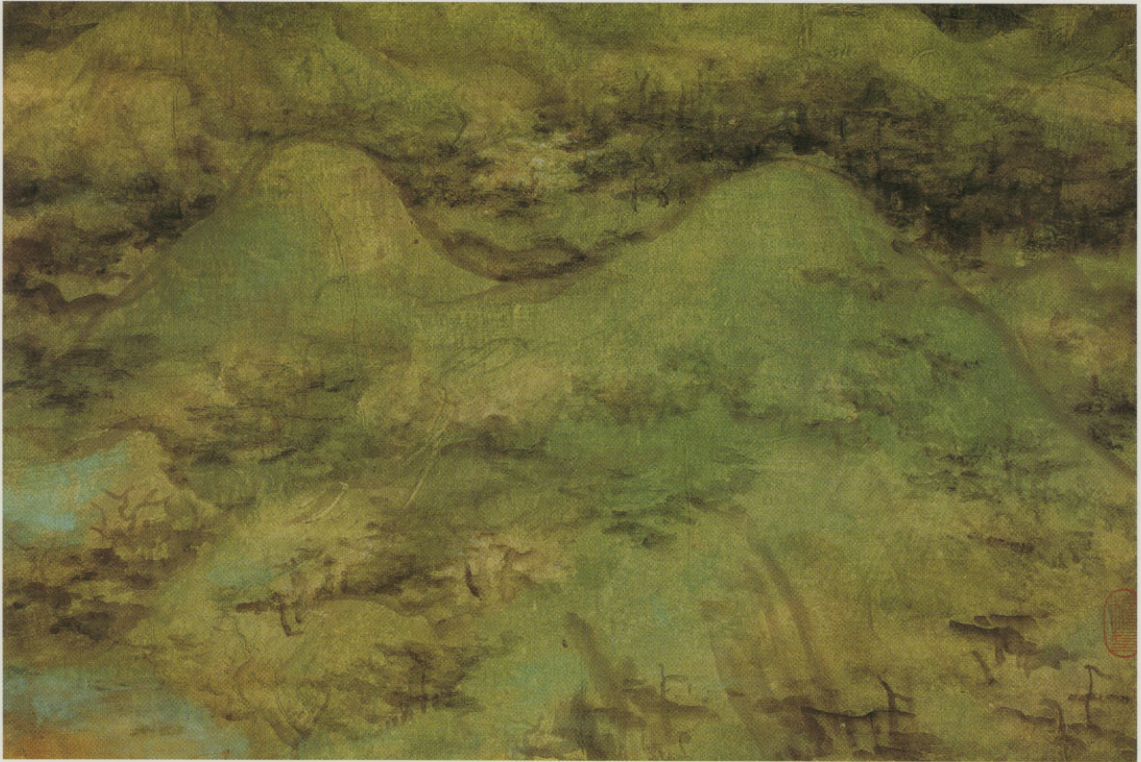


The Membership of the National Museum of Modern Art, Kyoto

京都国立近代美術館
友の会会報

2005
SPRING
第4号



村上華岳 夏の山 昭和6年（1931年）

展覧会の

見どころ

村上華岳展

4月12日〔火〕—5月22日〔日〕

休館:毎月曜日(但し、5月2日は開館)

毎週金曜日は夜間開館(入館は午後7:30まで/閉館:午後8:00)

「製作は密室の祈り」ということばを残し、芸術と宗教の融合を目指した孤高の異才、村上華岳への評価は近年ますます高まっています。この機に、華岳の芸術を改めて見直すべく、画家が青年時代を過ごした京都において久かたぶりとなる、大規模な回顧展を開催いたします。

華岳は、明治21(1888)年武田誠三の長男として大阪市内に生まれましたが、7歳の時に、神戸市花隈にある叔母の婚家、村上家で生活するようになり、神戸市立神戸尋常高等小学校に入学します。13歳で父を亡くし、一旦は武田家を継ぎましたが、3年後の37年、村上家の養子となりました。小さい頃から画を得意とし、36年、京都市立美術工芸学校に入学、その後さらに同校研究生を経て、42年この年新設されたばかりの京都市立絵画専門学校に進学します。同期には後に共に国画創作協会を結成することとなる、榊原紫峰、入江波光、土田麦僊、小野竹喬、野長瀬晩花がいました。華岳は両校で、円山四条派の流れを学び、浮世絵や南画、さらには西洋絵画を取り入れながら新しい日本画を追求し、新古美術品展、文展に入選、受賞を重ねて京都画壇で有望な新人として注目されます。ところが、大正5年の第10回文展で《阿弥陀》が特選となった翌年の文展では落選の憂き目にあうなど、新しい傾向を持つ作品への評価は不確かなものでした。そこで7年、同様に文展の審査基準に疑問の念を抱いていた麦僊、竹喬、紫峰、晩花に誘われて国画創作協会の結成に参加し、同展を中心に作品を発表します。華岳は長年憧れてきた西洋美術を実際に見るため10年、麦僊、竹喬、晩花らと渡欧することを計画しましたが直前に喘息の発作を起こしたため果たせませんでした。13年麦僊らの帰国を待って国展は再開しますが、画壇活動がかえって画家の自由な創作を束縛し、芸術活動を不純なものとするのではとの当初からの考えが強まり、また、持病の喘息が悪化したこともあって、15年の第5回国画創作協会展への出品を最後に画壇から離れ、翌昭和2年には神戸花隈に隠棲し、彼の人柄と作品を敬愛する数少ない人々に支えられながら、ひた

すら自己の精神的深化を求め、深い精神性と官能性を併せ持つ観世音像や六甲の山並、牡丹花などを題材として独自の水墨画の世界に沈潜してゆきます。しかし、持病が悪化し、14年の晩秋同地で五十二年の早過ぎる死を迎えました。

京都国立近代美術館では、42年前に村上華岳展を開催

しておりますが、今展はその後の調査結果をふまえ、初めて、或いは久しぶりに公開される作品を加えた代表作約270点に書、素描、下図、油彩画、更に書簡類も併せて展示するもので、華岳芸術の全貌を堪能していただける絶好の機会となると信じます。

なお、本画はその流れがよく分かるように、時代順に次の四つのコーナーに分けて展示いたします。①京都市立美術工芸学校在学中の作品から文展に出品した最後の年である大正6年までの作品。《二月乃頃》、《夜桜之図》、《阿弥陀之図》等。②国画創作協会を結成した大正7年の作品から兵庫県芦屋を経て花隈に移る大正15年までの作品。《妓女舞踊図》、《早春風景》、《日高河清姫図》、《裸婦図》、《松山雲煙》等。③国画創作協会への出品もやめ、画壇から離れて光存堂と名付けた画室で宿痾の喘息の発作に苦しみながら制作をしていた昭和2年から昭和11年までの作品。《墨牡丹之図》、《観音之図(聖蓮華)》、《夜摩天像》、《荒原晚照図》、《寒山松籟図》、《秋谿溪流之図》、《紅白椿花図》、《春泥》等。④自作100点を集めた個展を開催し、それまでの制作を振り返ることにより、更に進んだ境地を目指した数え50歳という区切りの年にあたる昭和12年から、亡くなる14年までの最晩年の作品。《太子樹下禪那之図》、《紅焰不動》、《雲中散華》、《羅漢》、《紅葉の山》、《牡丹(絶筆)》等。

(当館学芸課研究員 小倉実子)



日高河清姫図 大正8年
東京国立近代美術館蔵

美

心

短

信

浄土寺付近— 二月乃頃

地名として残っているのに、今はもう、どこに在ったか、ということすら定かでない、そんな場所がある。京都のように古い町では特にそうだが、転地や移動がしばしば行われたためである。「元」や「本」を冠した地名は、市内だけでも三十近く残る。「浄土寺」は東山連峰の主峰、如意ヶ嶽の北西麓一帯を言う地名だが、寺としてはもう、存在しない。元となった寺は大変古く、平安時代中頃の1019年（寛仁3年）、第25世天台座主明教が創建、大きな寺域と勢力を誇っていたという。室町時代になって、足利義政がこの地に別荘「東山殿」の造営をもくろみ、寺は相国寺の近くに替え地を与えられた。その跡地に建ったのが「東山殿」（1482年・文明14年）、つまり慈照寺（通称銀閣寺）である。市内半日コースの観光バスでも連れて行ってくれる、京都の代表的な名所の一つである。

さて、この作品、村上華岳の「二月乃頃」は、先に述べた浄土寺村の早春の風景を、やや古風に言えば、春耕の景を、吉田山の東斜面から写生したものである。華岳の学んだ京都市立絵画専門学校の卒業制作のための作品だが、当時、学校は吉田山の西、現在の東一条を西に下った左京区役所の辺りに在ったので、野外への写生や学業の暇の友人との散歩に、華岳たちはこの辺りを始終歩いていたのではないか。東山の連峰が目の前に展げ、北白川から浄土寺、鹿ヶ谷一帯へと田や畑、人家のこまやかに点綴する風景は、いかにも静かで、穏やかで、しかも、ひんやりと寂しい。いかにも孤独な青年華岳の心を、引きつけそうな風景である。盂蘭盆の8月16日に焚かれる五山の送り火の時、この位置からでは、前山に隠されて、如意ヶ嶽に灯される「大」の字は下方が少し隠れてしまう。それでも、多くの人がこの傾斜面に出て、逝く夏を惜しむのである。但し、この作品に如意ヶ嶽は無い。華岳が構図に苦心し、先生であった栖鳳の意見も聞き、思い切って削除してしまったのだという。



二月乃頃 明治44年 京都市立芸術大学蔵

華岳がこの絵を画いたのは、明治44年（1911）、23歳の時である。当時すでに琵琶湖疏水が引かれ、この画面の中央やや上方から左側にかけて、整然とした運河らしい渠が画かれる。中央の竹藪を巡って白川の清流が、南の岡崎の方向に流れてゆく。画面左上の、白々とした崖は、白川石の採掘場の跡なのだろう。比叡山は花崗岩質の崩壊を続ける山塊だから、大量の白い砂を下流に流してくる。白川砂として珍重されるが、それに似た白さが、思いなしか、この絵の基調にある。田は春耕が始まったばかりだ。後の華岳の作品の中心を成した、六甲の山の艶（えん）な緑、やわらかな山容が、この、いわば画家の門出の作と呼ぶべき作品に、すでに予感されるのは興味深い。先にのべたように、卒業制作として画いたこの作品を、華岳は同年の第5回文展に出品し、褒状を受けた。

今、吉田山に登ってみると、すでに田畑は何処にもなく、一面の住宅地となっている。それでも、山麓に散在する寺院の深い木立などは、昔の通り望見できる。耳を澄ませば入相の鐘の音も、聴こえるだろう。最近、三浦雅士著『青春の終焉』（講談社）という本が書店に並ぶが、それによると、青春という意識はその時代にも共通のものというわけではなく、明治以降のごく限られた時代のエリートに特有のものだったという。エリートとは、つまり、裕福な環境に育ち、高等教育にありつくことのできた人々のこと。「紅燃ゆる丘の花…」を高唱して青春を謳歌した、第三高等学校の学生たちの姿が想起されるが、「二月乃頃」を画いた日々、画学生であった村上華岳も疑いなく、その「青春」のまっただ中に居たはずである。

（加藤類子）

1F展示ロビーの展覧会

through the surface : 表現を通して -現代テキスタイルの日英交流

本展は、1998年の「REVELATION: テキスタイルの発言 -イギリスの今日」展(英国巡回・京近美開催)そして2000年の「Textural Space: 素材空間-現代日本のテキスタイルアート」展(英国巡回)に続く、第3回目のプロジェクトであり、特に今回は日英両国の現代テキスタイルの相互交流を目的として企画されました。まず2003年に日英のベテラン作家ならびに新進作家14名が7つのペアを組み、新進作家が相手国のベテラン作家のもとに数ヶ月滞在し共同制作を行うところから、このプロジェクトはスタートしました。参加作家は、相手国での生活を通し、パートナー作家とアーティストとして、そして人間として交流を深め、その成果として新たな作品を、個別作品ないしはコラボレーション作品として制作しました。本展では、それら24点の作品とともに、ウェブ上にリアルタイムで公開された交流過程を記録した映像資料も併せて紹介し、作品制作のプロセスに迫ります。

タイトルにある「surface」という言葉は、通常「外皮」や「皮膜」といったテクスチャーを意味します。しかし「through the surface」という表現になったとき、それは「すぐには見えない何かが目立ってくること」を指すようになります。本展の参



ジャネット・アップルトン & 吉本直子
《思い出の線: 放浪の記憶》
2003年、ウール他、90cm×45cm×20cm
photo: Chapman & Forsyth

加作家の殆どが「織り」や「編み」を基本技法として作品制作を行っていますが、ファイバー(繊維)が縦横に「織りなされ」「編み上げられ」出来上がる作品の構造は、そのまま「through the surface」のメタファーであると言えます。そこに顕れるのは作品や素材のテクスチャーだけではなく、素材や技法そしてコンセプトの選択のプロセスであり、それらをめぐる作家たちの交流の記録でもあるのです。その意味からも、本展が、今日のテキスタイル作品の多様性を示すだけではなく、それを見る私たちに文化横断的交流と共生のヒントを与えてくれると言えるでしょう。

(池田祐子: 当館主任研究官)

友の会の催し(予定)

村上華岳展記念ワークショップ

表装は私たちの日常からずい分遠い存在になっています。しかし、その美しさは独特のもので、私たちの祖は絵画をその表装と一体のものとして楽しんできたのです。今回の催しは、「村上華岳展」という格好の機会を得て、あらためて表装の良さを実感していただこうと開催したものです。表装おける裂地の取り合せを、京都表装協会にご協力をいただき、実際の作品に即して試みます。

- 第1回 平成17年4月29日(金・祝日)午後2時から
於・1階講堂 「村上華岳の作品と表装」
- 第2回 平成17年5月15日(日)午後2時から
於・1階講堂 「近・現代の日本画作品と表装」

4Fコレクション・ギャラリーの展覧会

国画創作協会と華岳ゆかりの作家たち
4月5日(火) - 5月15日(日)

「村上華岳展」を記念して、当館所蔵の国画創作協会活躍した画家と華岳ゆかりの画家たちの作品を展示します。村上華岳・土田麦僊・小野竹喬・榊原紫峰・野長瀬晩花ら、この会を創設したメンバーのその時代の作品を中心に、この運動に共感を覚え、新たに参加していった入江波光、石川晴彦、森谷南人子その他の作品を展示します。併せて、絵専時代の仲間である松宮芳年、紫峰を通じて知り合い、生涯交流を持った秦テルヲの作品も展示。

- 開館時間
午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 夜間開館
4月15日(金) - 9月2日(金)までの企画展開催中の金曜日
午前9時30分～午後8時まで(入館は午後7時30分まで)
- 休館日
毎週月曜日(月曜日が休日に当たる場合は、翌日が休館)、及び年末年始
(開館時間、休館日は臨時に変更する場合があります)

※お車で越しの場合、岡崎公園駐車場(地下)をご利用の有料入館者は、駐車場の割引(1台1名)を受けられますので、駐車券をお持ちの上お越しください。

交通案内



独立行政法人国立美術館

京都国立近代美術館

The National Museum of Modern Art, Kyoto

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町
TEL. 075-761-4111

テレフォンサービス 075-761-9900
ホームページ <http://www.momak.go.jp>